

上演5 2026年7月30日（木）5校目 四国ブロック（徳島県） 徳島県立城南高等学校 『空席』	第50回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第72回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会 担当委員 秋田県立横手高等学校 石河 かずは
---	--

幕が上がると現れるのはありふれた教室の風景。空席だらけの教室に、卒業式を欠席した生徒3人が集まっていた。

大人と子供の境界線上にいる私たちに、自分自身が高校生ではなくなり、大人として生きていく姿を想像することは難しい。特に子供でいられなくなることに對する寂しさや、先の見えない未来に對する不安を口にする講評委員が多かった。また、登場人物たちに自分自身を重ねるだけでなく、彼らを見守る立場に自己を投影した意見も挙げられた。

彼らは、自分や他人に関する問題をそれぞれ抱えており、それを他の登場人物たちとの会話を通じて共有し、共に過ごすことで彼らの関係性や心境が微妙に変化していく。人間が成長し、歳をとっていけば大人になるということは避けようがない。往々にしてその定義は曖昧で不安定であり、「大人」というものがどんな存在であるのかはなかなか掴むことはできない。子供でいられる最後の場所でありながら大人としての始まりを感じさせる高校という場所もまた、それと同じように不明瞭である。学校という場所が、苦痛に満ちていたのか、楽しかったのか、これからどのように生きていきたいのか、今後どのように生きていくのか。それは、まだはっきりとは分からない。そんな彼らの将来について心配や憂慮を感じたという意見が挙がった一方で、登場人物間での関わりを通して彼らが得た、新たな視点や考えに着目して明るい未来を想像したいという意見も挙げられた。それはきっと、「分からない」と繰り返しながら自分の足で進み始める彼らの姿があってこそそのことなのだろう。

たった3人だけで繰り広げられるこの作品は、一貫して暗く静かな空気が漂っており、作品内を通して余白がよく目立っていた。登場人物たちの会話のぎこちなさやセリフとセリフの間の空白が彼らの卒業という事象や学校という空間に對する感情を象徴しているように思え、彼らがこの教室で出会ったことに對する運命性や必然性を感じさせた。卒業証書の授与を練習する場面や、黒板アートをして「青春」を体験しようとする登場人物たちの後ろ姿も、彼らの表情を想像させたり未来へ向かっていく姿を思い起こさせたり、よりいっそう彼らへの思い入れや自己投影を強めた。

人は誰しも大人になる時を迎え、その成長の先にある人生は、自らの手で切り開いていく必要がある。「空席」は、自身の行く末に悩み、それらについて考え続けるすべての人々に現実を突きつけ、そして寄り添ってくれる静謐な作品であった。

